「藤まつり」で会いましょう！

2017年4月23日、午前10時30分。
春日部市コミュニティ推進協議会の主催による第36回「春日部 藤まつり」がにぎやかに開幕した。
快晴の春の日、満開の藤が咲き競う「ふじ通り」に19万人の笑顔が輝いた。
さあ、今年も、「藤まつり」で会いましょう！

始まりは1982年 春日部の「春の風物詩」に

ズン、ズン、ズン、ズン……。
抜けるような青空に、ダンスミュージックの重低音が、心地よく吸い込まれていく。ビートに合わせて軽やかにステップを刻むのは、小学校低学年のちびっこダンサーたち。軽快な動きが、アスファルトの路面に、くっきりと影を刻む……。
わが子のパフォーマンスに熱心にビデオカメラを向けるお父さん、お母さん。その一群に涼やかな日陰を提供しているのは、藤棚からこぼれるような紫色の花房――そう、今日は、春日部市民に初夏の訪れを告げる「春日部藤まつり」の開催日だ。
藤まつりは、春日部駅西口大沼線歩道にフジが植樹されたことを記念して、1982年に「第1回春日部藤まつり」が開催されたのが始まりだ。現在、通りの両側に植栽されたフジは218本。約1・1キロメートルにわたって続く藤棚には、7種類のフジが咲き誇る（6ページ参照）。その美しい花と香りを楽しもうと、毎年、多くの観光客が訪れる。
春日部市コミュニティ推進協議会コミュニティ部会長の「開会宣言」を合図に、ファンファーレが響きわたる。今年は、どんな笑顔に会えるだろうか？

「春日部藤まつり」の横断幕を手にパレードを先導するのは、ボーイスカウト・ガールスカウトのメンバーたち。ボーイスカウトのブースでは、道行く人たちに活動について説明し、参加を呼びかけていた。

主催者、来賓、市職員は、春日部市の特産品である「麦わら帽子」をかぶりパレードを行っている。

パレードで演奏する姉の姿に憧れて……

11時、春日部郵便局交差点に、金管楽器の勇壮な音色が響く。いよいよパレードのスタートだ。

パレードの先頭を飾るのは、春日部市立春日部中学校吹奏楽部「チャレンジャーズ」。マーチングコンテスト全国大会で金賞を受賞した経験も持つ強豪校だ。

「藤まつりは、チームが新体制に替わって初めての大舞台。毎年、特別な気持ちで参加しています」と話すのは、3年生の部長・三浦佳菜美（みうらかなみ）さん。彼女が初めてパレードの一員として藤まつりに参加したのは小学校3年生のとき。チャレンジャーズで演奏する姉の姿に憧れ、「いつかは自分も、あのユニフォームを着て演奏したい」と願ってきた。今年は、自らがリーダーとなって39名の部員を率いる。その緊張感からか、キリリと引き締まった表情が印象的だ。マーチングは音づくりだけでなく動きも加わるため、相当な練習が必要となる。生徒たちは全国大会出場を目指し、平日は毎日午後4時から6時までの2時間、練習に励んでいる。

「藤まつりのパレードは、保護者の方々や、卒業した先輩たちも、〝今年のチームはどんな演奏を見せてくれるだろう〟と期待を込めて見守ってくれています。そして、地域の人たちのあたたかい応援を肌で感じられる場でもあるんです。日ごろ応援してくださっている皆さんに恩返しをしたい……そんな思いで演奏しています」と三浦さん。顧問を務める山崎里美（やまざきさとみ）先生も、その思いを語る。

「コンクールでの入賞も大切ですが、演奏や演技だけでなく、地域の方々に愛される礼儀正しい人に育ってほしい……チャレンジャーズには、そんな伝統も受け継がれているんです」

チャレンジャーズの後にも、幼稚園の鼓笛隊や小学校の金管バンドなど16組のパレードが続く。涼しげに咲き誇る藤棚に沿って、沿道のあたたかい声援が連なっていた。

第1回から参加しています みんなで踊るのが健康の秘訣

午後になると、ふじ通りが6つのエリアに分かれ、各種イベントが始まった。春日部駅に最も近い第1会場では、小学生による「沖縄エイサー」、第3会場では「阿波踊り」、そして第5会場では県内外から集まった26団体による「よさこいソーラン」と、ふじ通りの熱気が高まってくる。

第2会場では「流し踊り」が始まった。春日部市連合婦人会、春日部市文化連合会、庄和音頭保存会など5つの団体がリードし、沿道の人たちも飛び入り参加して大きな踊りの輪ができあがる。中でもひときわ目を引くのが、裾に藤の花をあしらった揃いの着物で踊る一団。春日部市民踊（みんおど）レクリエーション連盟のメンバーたちだ。会長を務めるのは三ノ輪（みのわ）浪子（なみこ）さん。藤まつりをはじめ、毎年、全国各地で開催されるイベントにも参加しているという。

「会員は290名、今日は160名が参加しています。夏には市内各地の盆踊り会場で、それぞれ地元の会員たちが踊りますが、会全体で参加できる藤まつりは、私たちにとっても最大の晴れ舞台。実は、私たちは第1回からこのお祭りに参加して踊っているんですよ。藤まつりは、沿道の皆さんも大勢参加してくれるので、毎年とても楽しみにしています」

ポカポカ陽気の中、額にはうっすらと汗が浮かんでいる。冷たいお茶を飲み干して、再び踊りの輪に加わった。

春日部市民踊レクリエーション連盟会長の三ノ輪浪子さん。「民謡に合わせて体を動かすことが元気の源。今後も続けていきたいですね」

パレードには、春日部中学校（写真上）をはじめ、豊野中学校のマーチングバンド（写真中右）や八木崎小学校の金管バンド（写真中左）など16団体が参加。

5つの団体による流し踊りには、誰でも自由に列に入ることができるので、お年寄りから小さな子どもまでが1つの大きな輪になり、楽しく踊っている。

藤まつり名物の「藤おこわ」今年も「うれしい悲鳴」

藤まつりに参加する市民や観光客にとって、沿道に軒を連ねる模擬店も楽しみのひとつ。今年は50以上のブースがふじ通りを彩った。

お好み焼きやチョコバナナといった露店でおなじみのメニューが並ぶ中、「藤おこわ」という文字が目に留まった。

出店しているのは、春日部市食生活改善推進員協議会。市内の各地域で、食を通じた健康づくり活動を、推進しているボランティア組織だ。会長の樋口京子（ひぐちきょうこ）さんに話を聞いた。

「25年ぐらい前、藤にちなんだメニューをつくろうとみんなで開発したんです。去年までは250個用意していたんですが、お昼には売り切れてしまったんです。そこで今年は、会員たちが協力してなんとか350個つくりました」

鮮やかな藤色の秘密は黒豆と梅干し。ひと口ほおばると、黒豆の香りと梅の酸味が口いっぱいに広がる。パッケージには、自宅で藤おこわを作るためのレシピも添えられている。

「回を重ねるごとに〝毎年、楽しみにしています〟と言ってくださる方が増えているんです。うれしいですね」

話している間に、最後の1個が売れていった。時計を見ると、まだ12時6分だ。

「この調子では、来年は500個ぐらい準備しなきゃいけないかも」

樋口さんたちの〝うれしい悲鳴〟は、来年も続きそうだ。

86名のキッズダンスチーム圧巻のパフォーマンス！

14時、藤棚を仰ぎ見る歩道は、さらににぎわいを増してきた。そんな中、第2会場付近にひときわ混雑する一角が……この記事の冒頭で紹介した、キッズダンスのステージだ。

春日部市を拠点に活動するキッズダンスチーム「ドロップス」は、今年で創設8年目。現在は、3歳から高校生までのメンバーが86名、大人を合わせると総勢100名を超える大所帯だ。市の産業祭、春日部コミュニティ夏まつりなど、年間約20か所のイベントに出演している。

チームを率いるのは、「ドロップス」の代表・たていしみかさん。音源の制作から振り付け、ステージの構成までを1人でこなす。

「藤まつりは、子どもたちが毎年心待ちにしているイベント。青空の下で、気持ちよく汗をかきながら踊れるのがうれしいですね。ステージも全方向なので、360度どこから見ていただいても楽しめる演出を心がけています。チームを卒業した子たちも、藤まつりにはスタッフとして参加してくれるので、同窓会みたいな雰囲気もあって楽しいです」

約30分間にわたって繰り広げられたステージ。そのフィナーレを飾るのは、86名全員参加のパフォーマンスだ。観客から沸き起こる拍手と声が次第に高まり、いつしか会場は、大きな一体感に包まれていた。

36年前、地域のコミュニティ形成を目的に誕生し、以来、多くの市民が協力して大切に育ててきた「藤まつり」。歳月を経て、2017年の来場者は19万人と大きく成長した。参加する人たちは、それぞれの思いを胸に、このふじ通りに集う。これからも、満開の藤が彩るこの場所で、人々の笑顔が弾けることだろう。

市内外から集まったよさこいソーランの団体は26団体。

和太鼓団体「彩誠太鼓」の迫力満点の演奏。

エネルギッシュに全身でメンバーに指示を送る代表のたていしさん。座右の銘は「根拠のない自信。それを裏付ける努力」